平成22年［第19回］

戦歿者追悼平和祈念の集い

戦歿者を追悼するこの日、「祖国を愛する心」に触れる…

記念講演

耳を澄ませば聞こえる彼方からの声

硫黄島で英霊と共に生きる自衛隊の活動に接した女性ジャーナリストがその体験と国防の現状を語る

桜林美佐（さくらばやしみさ）氏
〔ジャーナリスト〕

昭和45年、東京生まれ。
日本大学芸術学部卒。
フリーアナウンサー、ディレクターとしてテレビ番組を制作した後、ジャーナリストに。

著書に『奇跡の船「宗谷」ー昭和を走り続けた海の守り神』『海をひらくー知られざる掃海部隊ー』（ともに並木書房）『終わらないラブレター　祖父母たちが語る「もうひとつの戦争体験」』（PHP研究所）この他、国防問題などを中心に取材・執筆。

HP&「国防日記」
http://www.geocities.jp/misakura2666

〔日　時〕
平成22年8月15日（日）

- 10:00～ 英霊感謝祭（広島護国神社主催）
- 10:50～ 追悼集会開会
- 11:00～ 記念講演
- 12:00～ 黙　祷
- 12:20　閉　会

〔場　所〕
広島護国神社 参集殿
広島市中区基町　TEL082-221-5590
P 駐車場あり

〔追悼集会参加費〕
1,000円［学生無料］

ボランティアスタッフ募集!!
チラシ配布・当日の運営など
TEL **082-831-6205**

主催 **日本会議広島**

お問合せ先　〒731-0102 広島市安佐南区川内4-11-18 TEL.082-831-6205 FAX.082-831-6206

お申込み方法／下記要項にご記入の上、この用紙のままFAX、メール、お電話でお申込みください。

戦歿者追悼平和祈念の集い／参加申込書

FAX送付先　**082-831-6206**
メール　**info@jp-pride.com**

フリガナ
氏名　　性別　男・女　　年齢　　歳

住所　〒　　会　員・非会員（どちらかに○をして下さい）

電話　　所属団体（会社）名

FAX

8月15日は、ご家族づれで護国神社にお参りしましょう。

ご記入いただいた個人情報は、当行事のご案内、主催・後援団体からの各種ご案内以外には使用いたしません。また、第三者に提供することは一切ありません。

英霊は今も国を守り続けている
――硫黄島で考えたこと

桜林美佐　ジャーナリスト

ご遺骨の一日も早い帰還を願うことは当然だ。しかし、それと共に想い起こすべきは英霊の国への思いであり、我々自身の国防への意思ではないか。

●いまなお一万三千余柱が眠る硫黄島

今年も夏から、厚生労働省が四回にわたり硫黄島の遺骨収集を行うと報じられた。この島にはまだ一万三千柱以上のご遺骨が眠ったままなのだ。

私は一度だけ、この島で勤務する海上自衛隊部隊での講演のために訪れたことがあるが、今なお海底火山が活動し、隆起を続けているため地熱が高く、強い日差しとあいまった暑さで、この島での遺骨収集はどんなに大変かと先ず感じた。まして、壕の中は六十度以上にもなるというから、呼吸も困難であろう。そうした条件下で作業をされるボランティアの方々の活動は尊く、頭が下がるばかりだ。

しかし、硫黄島の遺骨収集はまだ先が見えない状態である。多くのご遺骨が海空自衛隊が使用している滑走路の下にあるために、それを剥がして作業をしなければならないからだ。今年、この調査費として一億円の予算が計上されたが、新滑走路建設予定地の遺骨収集の後、滑走路を移転させ、現在の滑走路を剥がしての遺骨収集という、大規模な事業となり、数百億円の莫大な予算と約十年に及ぶ時間が必要になるのである。

そもそも、この問題が今、湧き上がったのには、ここ近年の映画などで急に話題になったことにより、硫黄島のことなど忘れていたのを棚に上げて、「国は何をしている」などとマスコミなどが言い出したことが背景にあるように見える。長年のご遺族の声もあるが、そうした扇動的な空気も見え隠れするのだ。

また、よく報道では「自衛隊の基地になっているため、遺骨収集ができない」という文言を聞くが、あの基地は米軍が占領中に造ったものであり、自衛隊が遺骨収集を阻害しているような言い方は見過ごせないものである。

彼ら報道関係者は知っているのだろうか、携帯電話もメールも通じない島に暮らし、島内の戦跡や慰霊碑を整備し、三日もすればジャングル化する草を日々刈っている自衛官の滴る汗を。また未収集の遺骨は、硫黄島だけではなく、国内外の同胞が一人残らず還らなければ、どこかで泣いているご遺骨が残るという側面もあるということを。

●英霊と共に生きる自衛隊員たち

その硫黄島の自衛隊は、洋上や父島・母島などの急患輸送で活躍しているが、千三百キロ離れた地で満たされた生活を謳歌する私たちも、彼らに助けられていると言えよう。それは、彼らが毎日ご英霊に常に語りかけるようにして水を捧げたり、慰霊を欠かさないからだ。だから、内地の多くが先人たちへの感謝の気持ちを忘れてしまっても、なんとか生かしてもらっているのではないかと思う。

赴任して数ヶ月の若い自衛官から「休暇で内地に帰ったら、コンビニに行くのが楽しみです」と言われ、切なくなってしまった。しかし、不思議なことに昨日まで、私たちと同じような便利な生活をしていた彼が見せた表情は、輝いていた。島内の売店は定期便が届く週に二日だけ開くが、ディズニーランド顔負けの長蛇の列で、なかなか買えないのだという。そんな不便な生活をしているのに、皆の顔は明るい。それはなぜだろう。

「水も飲める、食事もできる、シャワーも浴びられるなんて、本当に幸せなことだと思っているんです」

そう、彼らは無数のご英霊と日々向かい合ううちに喜びのバロメーターが変わっていたのだ。

●心をなくしたままでいいのか

遺骨収集は、戦後の日本が積み残してきた課題であることは事実であり、一日も早い帰還を願うものである。しかし、いくらご遺骨を掘り出しても、心はなくしたままでは、この事業はままならない。真に掘り起こすべきは、愛する祖国を守るため、到底、考えられないような灼熱の中での壕建築や、補給の途絶えた状況で壮絶な戦闘を続けた、その「国への思い」であろう。また、当時、「草むす屍」と覚悟していた先人たちにとっては、むしろ遺骨の帰還よりも、家族や戦友たちとの再会は靖國神社の桜の下で、という約束に重きを置いていたという一面が、この議論において欠落しているのも、やや気にかかる。

こういう見方もできるのではないか。**硫黄島では、一万人余の将兵が地下に潜んだまま国家防衛に努め、時が止まっている。一方で、内地では多くの国民の愛国の心が、感謝の念が、生きていることへの喜びが、全てが地中に埋もれたままなのである。**

今、掘り起こすべきは、一体、何なのか。国家としての仕事は、予算を計上するだけではなく、先人たちの心や魂の遺産を守り続けること、それに**先人たちが守ろうとした国家を防衛するために最大限、努力することではないだろうか。**

八月十五日を迎えるにあたり、今一度考えてみたいことである。

（「日本の息吹」
平成21年8月号より抜粋）